20061

当院における OCT ガイド下における冠動脈内治療の特性についての比較検討

背景

冠動脈内画像診断装置である OCT はゴールデンスタンダードであった IVUS と比較し、高解像度であり病変性状にてより多くの情報をもたらし得る。一方、限られた深達度のため内腔に関する定量評価は IVUS と比較してそれは過小評価されることも知られている。当院における冠動脈インターベンションが、OCT および IVUS ガイド下にてどのような臨床的、手技的違いをもたらすか比較検討した。

方法

当院にて 2013 年 10 月から 2014 年 4 月までに OCT 又は IVUS ガイド下冠動脈インターベンションを行われた症例を、OCT ガイド群、IVUS ガイド群の 2 群に分け患者背景、手技的特徴を比較した。

結果

100 症例(安定狭心症 70 名、急性冠症候群 30 名)、111 病変を検討した。OCT ガイド群 21 病変、IVUS ガイド群 90 病変において冠危険因子、腎機能、病変部位、AHA 分類による病変形態では有意な差は認めなかった。定量的冠動脈造影法では最小血管径は、OCT 群で小さい傾向があった(0.69±0.28vs.0.89±45p＝0.058)。また透視時間は有意に OCT 群で短く(19.5(14.4－25.1)vs.31.7(19.0－42.2)p＝0.002)、造影剤量は両群で差は認めなかった。複数本の Stent 使用は IVUS 群で多い傾向があり選択した Stent 径に差は認めなかった。

まとめ

今回 OCT および IVUS ガイド下冠動脈インターベンションの特徴を検討した。OCT ガイド下は IVUS ガイド下と比較して、より正確な定性的および定量的病変把握が可能であり、造影剤使用量は変わらないが透視時間は短かった。そのため OCT は正確な Stent size の決定を可能とし手技時間の短縮につながる可能性があると考えられた。